

令和四年 小山田信茂公顕彰会 発表資料 十二月十日

演題 **岩殿大岩壁の松風を聴き真実を視る**

信茂公の先を見る眼と

勝頼公と涙の決別・決断

「歴史物語」

発表者 小俣公司

小山田信茂公顕彰会 会長

全国歴史研究会 正会員



# 信

## 茂公出陣の図

小山田（弥三郎）信有の子

1561年、「第四次川中島の戦い」で高坂昌信に従い長尾景虎勢の奥信濃衆（村上義清、高梨政頼、井上清政）と戦い戦功を挙げた。1569

年、「武蔵滝山城の戦い」で武田晴信に従い北条氏照勢と戦い戦功を挙げた。1572年、「遠江三方ヶ原の戦い」で武田晴信に従い先陣を務め、松平元康の家臣石川数正勢と戦い戦功

を挙げた。1575年、「三河長篠の戦い」で武田勝頼に従い織田信長・松平元康勢と戦い大損害を受けた。

天正10年3月、時あたかも巨星落つとも例えられよう武田家、小山田家滅亡の時（1582年天正10年2月から3月にかけての事）と、信茂公・勝頼公が、歴史の中に思い描いていた事の実現に向けて計画立てた大岸壁に440年後の2022年令和4年3月、岩殿山麓の賑岡町井山にある、曹洞宗岩空山威徳寺本堂において、信茂公・松姫様の合同供養祭を本会が主催し、松姫様菩提寺、「金龍山信松院」ご住職・西村様、威徳寺ご住職・林様の読経中、爽やかな二陣の風が、鮮烈に440年間の歴史の扉を押し開いて吹き抜けてくれた話である。

## 一、高遠城落去

時は天正10年3月、遂に織田徳川連合軍の「甲州征伐（武田家征伐）」が開始された。

きっかけは、天正10年1月27日、木曾義昌謀叛の知らせが武田勝頼に入る。それを攻めようとした勝頼。2月2日、織田信長は武田総攻撃（東夷・武田家征伐Ⅱ甲州征伐とも）の命令を出し、信濃伊奈・木曾からは織田信忠、駿河から徳川家康、相模から北条氏政、飛騨から金森長近が侵攻。総勢25万の兵力とも言われる軍勢が甲斐に押し寄せた。

天正10年、2月2日に武田勝頼による木曾一族への侵攻を知ると勝頼討伐を決定、動員令を発した信長。

信長の永年に亘る、武田信玄公への畏怖・恐怖の念からか、攻撃の手は凄まじく、進軍する所の城、砦、町並み、神社仏閣等々、領民の全てを焼き払うという凄まじい勢い、冷酷無比な仕打ちであったと伝わる。その伝聞が凡そ440年間伝えられている攻撃、侵攻を開始した。

信長・おのれ勝頼め、吾が麾下に入った木曾氏を攻撃してくるとは、こしゃくな、それならばこちらも考えがある。

秀忠、秀忠、何処におる。

秀忠・父上、何事でござる、そのような大声を上げて、荒げた声で、一体どうしたというのござりまするか。

信長・おー、来たか。よつく聞けい。武田勝頼めが、小癩にも、木曾義昌の領地へ侵攻したとのことである。

信忠・(えっっ) 何ですと、あの木曾殿のですか。

信長・左様、そうよ、その木曾義昌よ。勝頼め。秀忠、出陣じゃ、直ぐに戦の支度をせい。

・いや待て、その前に大至急、軍議じゃ、人を集めろ。信忠、大将は信忠お前がせい。儂が出かけるまでその方に任せる。いかような編制をする。

信忠・ははっ先鋒に森長可、団忠正、木曾義昌、遠山友忠を、以下、本隊に河尻秀隆、毛利長秀、水野守隆、水野忠重をそして付属は織田長益  
他織田一門衆、丹羽氏次他、軍監に滝川一益で如何でしょうや。

信長・うっむ、良き布陣である。

この出陣に当たり、信長は「今回は遠征なので連れていく兵数を少なくし、出陣中に兵糧が尽きないようにしなければならぬ。ただし人数が多く見えるように奮闘せよ」と書状を出している。さらには明智光秀らが朝廷に働きかけ正親町天皇から「東夷武田を討て」との命を出させたことで大義名分を得た出陣であった。

日本古来からの戦いで「征伐」なる言葉が、使われたのは最初で最後の事である。それ位信長の気持ちはにつつき信玄であったのである。

信忠・皆の者、甲州征伐の始まりぞ、「相手は、朝敵ぞ、良いか」

家来一同・おーッ(地面が震え木々までもが大揺れになるほどの鬨の声を上げた。)

信忠・出陣じゃあ。ホラ貝を吹けい。

織田軍は、高遠城攻撃に向けて進発し、3月2日に3万人ないし5万人とも言われる兵が総攻撃を開始した。仁科盛信は、譜代家老らと共に500人ほどの家来達と籠城し、織田軍と激闘を繰り広げた。織田方も織田信家が戦死するなど大きな被害を受けたが、数で勝る織田軍に城門を突破されるに及び、ついに仁科盛信・小山田昌成・大学助(郡内小山田氏とは、系統が異なる一族の用である。)、渡辺照、諏方頼辰らは戦死

ないしは自害し、高遠城守護の軍兵は 1 人残らず城を枕に討ち死にし遂に落城した。

信忠・苦しかった。しかし、敵ながら立派な戦い方であった。この男が敵でなく、味方であったなら、ふうー、惜しい、

誠を持って惜しい。敵に回すには、実に惜しい肝の据わった立派な大将であった。

信忠・者共、勝ち鬨の声をあげい。ホラ貝を吹けい。

兵達・おー、おー、おー。

木曾谷に訝し長く響き渡った。盛信等の慟哭の声にも聞こえた。

信忠・いよいよ勝頼めの新府城攻撃である。皆の者、この後、じつくりと休ませい。

家来達・ははっつ

## 二、新府城落去

新府城の築城は天正 9 年（<sup>1581</sup>年）から開始され、年末には勝頼が躑躅ヶ崎館から新府城へ移住している。天正 10 年（<sup>1582</sup>年）信濃での木曾義昌の謀反を鎮圧するため諏訪へ出兵するが、織田・徳川連合軍に阻まれて帰国。織田軍は更に甲斐国へ進軍し、勝頼は 3 月 3 日には小山田信茂の岩殿城に移るために、城に火をかけるに至った。

新府城内、軍議から撤収へと

勝頼・真田、跡部、秋山、長坂、小山田の五人をこれへ呼べ。おーそうじゃ信勝もな。

家来・ははっ。真田様、秋山様、長坂様、跡部様・小山田様、お館様が、大至急集合せよとの仰せでござります。信勝様も共にこのこととござります。五人はうむ、ご苦労、直ぐにお館様のところに参る。と返事をして執るものも執らずに駆けつけた。

五人・お呼びとのこと、大至急駆けつけました。対織田の軍議ですな。  
信勝・父上、お呼びのことですが。

勝頼・うむ、その通りじゃ。これから儂が言う事を良く聞いて、相談してくれい。・仁科盛信が奮戦してくれた高遠城が既に落ちた。ここ新府も直ぐに織田方に攻撃されるであろう。そこで、皆の考えを聞きたいのじゃが、・・・？

真田・お館様、お館様はいかようにお考えなのか。お聞かせ下されませ。

勝頼・それもそうじゃな。では、話そう、遠祖、新羅三郎義光公以来続けて来た吾が武田家も、いよいよもって、憎き信長目に攻撃されており、行く末が心配じゃ。信勝の事もあるしう。なかなか決断がつかぬのじゃ。それで、皆の者に相談したいのじゃ。

信勝・父上、私は既に腹に決めております。ここ、新府城を枕に、織田方に徹底的に抗戦したいと思っております。

勝頼・うむ、よくぞ申した。それでこそ吾が武田家の惣領よ。他の者は、どうじゃ。

跡部、秋山、長坂の3人は、

・ははっ。そのことで3人で軍議してありましたところでした。

真田・お待ちください。この火急な時期に3人での軍議とは、聞きづてなりませぬ。今は、皆で武田家存続のために力を合わせる時。お館様、我が意をお聞きいただけませぬか。

勝頼・うむ、真田の言う通りじゃ。聞かせてくれい。

真田・はは、これは有り難き思し召し、吾が意を申し述べます。

真田・昌幸め思うところを申し述べます。お館様、少し離れておりますが、今ならまだ間に合います。是が非でも吾が城、岩櫃城へお越し下され。真田昌幸が城へ勝頼公をお迎えし武田家の巻き返しを図る為の一策をしていただきたい。

勝頼・うっむー（目を閉じ、黙して語らず）

一同・真田殿の申し出、至極大事であると思われるが、

秋山・跡部・長坂・お館様、

確かに真田殿の岩櫃城は堅固であると思われる。しかし、のう。のう、小山田殿、小山田殿の岩殿城とて岩櫃城に劣らぬ堅固な城である。と聞き及んでおるが、いかがなものであろうかのう。

信茂・静かに皆の話を聞いていたが、信茂の考えを、お館様に申し上げます。岩櫃城よりも確かに近距離ではありませんが・・・。  
しかし、お館様に入っていたくには少しく準備が必要です。お館様が住まわれるには、屋敷もそれなりのものを用意せねばなりません。岩殿城と申してもあそこは、主に狼煙台としての立地であり、生活するための用意が調っておりませぬ。もしここで、岩殿皆へ  
とお館様のご所望であるならば、それは是が非でも無きこと、

勝頼初め一同、声無し

信勝・それ見よ、儂が考えている。ここ新府にて籠城徹底抗戦すれば良いのじゃ。

勝頼・うっむ。信勝の言うことにも一理ある。しかし、残念じゃが、城に幾人の兵がおる。人質を入れていいところ二千人程であろう。皆の考えはよくわかった。よし、信茂、岩殿に世話になろうぞ。

一同・お館様。

声なき声がつつつ、うつつと静かに室内に漏れる。

3月1日、深夜、信茂は突然、勝頼から呼び出しを受けた。

勝頼・信茂、黙って儂の話を聞いてくれい。

信茂・この深夜、表情からしてよほどのことであると直感した。

※話し出した内容は、概ね次の三点である。

一、笹子峠で、儂を鉄砲で撃て。

二、儂が首を持ち、織田方に投降せよ。小山田が生き残る唯一の方策じゃ。

三、我が妹、松姫を北条氏照がもと、八王子へ退避させよ。その際、盛信が娘(弟・仁科盛信の高遠城に織田軍が攻めてくるとの知らせに、兄

盛信の3歳になる姫を連れつれて高遠城を逃がれた松姫様。その後、新府城に行つて兄・勝頼の4歳になる姫、人質として預かっていた小山田信茂の4歳になる姫も加えよ。

信茂、突然の勝頼の申し出に対して、言葉を飲み込んだ。

仁科盛信の娘・小督姫(出家)、武田勝頼の娘・貞姫(宮原義久室)、小山田信茂の娘、又は養女・天光院殿(内藤忠興室)、そして幼き仁科信基を連れ、相武国境の案下峠を越えて、武蔵国多摩郡恩方(現・東京都八王子市)へ向かい、金照庵(現・八王子市上恩方町)に入るよう、手配を頼む。その方、北条家家臣・松田憲実と親しかろう。

四、松姫に我が意を伝えよ。信茂、しかと頼んだぞ。武田家再興も、…………。

信茂は、4つの命を受け、ご立派な御領主様になった。そこまで先を見ておられたか。委細承知、我が名は汚れても、殿のご命令は、必ずや守りましようぞ。と決心した。(ここで、裏切り者と称されるかも知れぬが、全てが武田家の御為、)

### 三、古府内通過(躑躅ヶ崎館)

天正10年3月2日未明に、新築間もない新府城に自ら火を放ち、郡内大月岩殿砦での籠城を決めた勝頼一行は、凡そ千人の大移動となった。しかし、明るい希望ではなく、これからどうなるのであろうか、不安が一杯の出立となった。

いつもなら、ここで大勢の街中衆が、お疲れ様、ご苦労様の大きな声が聞こえたに。勝頼様は我らを一体どのように守ってくれるのであろうかとの不安が先に立っていた。

躑躅ヶ崎館を横に見て、一行は進んだ。

御坂道へ進む者は、戦闘用具一式を荷車に乗せて先行した。

それを見送った凡そ四百人ほどの者は、勝頼を含めて闘うことのできる者は、凡そ<sup>200</sup>名程、他の者は行く先が無く、勝頼公御側にいた女房・子ども達が大半であった。織田軍に追いつかれたくない一心で、草深い細い笹子道へ向けて言葉も無く歩いた。

何時しか辺りが夕闇に包まれていた。勝沼の大善寺の山門が目に入ってきた。

#### 四、大善寺泊

織田信長の甲州征伐が勃発すると、天正 10 年 1582 年 3 月 3 日、新府城から落ち延びた武田勝頼一行が大善寺に立寄った。

理慶尼からすると勝頼は、兄「初見史料は甲斐都留郡岩殿七社権現（山梨県大月市）の棟札で「武田左衛門大夫**信友**」として見られる」の仇の子息ではあるが快く迎えて（勝沼良晴に嫁したのち勝頼の乳母となっていた理慶尼）、大善寺薬師堂に勝頼、勝頼夫人、武田信勝を迎えて理慶尼と 4 名で寝所を共にした。

勝頼・皆の者、苦勞掛けるな。叔母上のいる大善寺がもうすぐじゃ。何処に今夜は宿を取らせてもうらおうぞ。

従者一同・ははっ。

勝頼・叔母上、このような事になって誠に相済まない。父上初めご先祖様方に合わせる顔がない。

理慶尼・勝頼殿、何も仰いますな。ご先祖様方とて勝頼殿の真似はできません。

その夜は 4 人でお思いのたけを話し込んだ。気がつくくと、丸窓から早暁の淡い日射しが差し込んできていた。

勝頼・叔母上様、大変な世話に相成り申しました。お元気で過ごして下さい。皆の者出発じゃ。一同・ははつ。

陽が高くなる頃、駒飼の入り口に着いた。

勝頼・駒飼の家々がその向こうにようよう見えるところまで来た。笹子峠も近くなったぞ。

勝頼に付き従う婦女子らは、声も出ないほど疲れきっていた。

駒飼につく頃、勝頼の二才になる子が、高熱を出した。疲れと飢えであろう。勝頼は、すぐさま配下の兵と子を鎮目村の医師、渡邊某のところ  
に差し向けた。一行には、我が子が帰るまでは、ここを動かないと示した。しかし、追っ手はすぐそこまで迫っているのである。何と七日間も  
ここに滞留してしまったのである。息子の報せは、残念ながら息絶えたとの報せがあった(諸説あり)。(春日居町鎮目・芍薬塚)  
この間、駒飼村に陣屋を構えて織田勢を待ち受けていた。

## 五、鶴瀬・駒飼七日間滞留

勝頼・吾が息子の様子は如何した。

女房・未だ何のご連絡もありません。

勝頼・そうか、何事も無ければ良いがのう。そうじゃ、こうしてはおられぬ。土屋、土屋を呼び。

女房・土屋様、お館様がお呼びでござります。

土屋・そうか、いかな用事かのう。

土屋・お館様、土屋惣藏、思し召しによりまして参上致しました。

勝頼・おー土屋、早速来てくれたか。追っ手の様子はいかがなものか

土屋・ははつ。手の者を田野口、日川の少し先まで見張りに走らせております。今のところ織田方に動きはないようにござりまする。

勝頼・うむ、そうか。少しくここに在陣せねばなるまいのう。どうじゃ、簡単な陣屋でも建てることはできぬかのう。

土屋・殿、わかり申しました。ここ駒飼と鶴瀬の方も気になります。従って、両方に陣屋を作るように、里人に頼んでみましようぞ。

勝頼・うむつ。すまぬのう。頼むぞ

土屋・ははつ。

土屋は、早速駒飼の里人に陣屋作りを頼みに走った。またここから2里ほど離れた鶴瀬の里人にも陣屋作りを頼んだ。

土屋・駒飼の衆、誠にすまぬが勝頼公たつての仰せじやて、陣屋を建ててくれぬかのう。

駒飼の衆・建ててやりたいが、ここだけでは木が足りぬし人の数も少な過ぎて、たいした陣屋は建てられんかのう。

土屋・いやいや、野宿よりはましじゃ。すまぬの。儂はこれから、鶴瀬の衆にも陣屋作りを頼みに行くで。まずは、雨露をしのげる小屋から建ててくれたら有り難いがいかなものじゃろう。

駒飼の衆・土屋様に頼まれたなら、できるだけのことはしておくが、期待しないで下されよ。

土屋・何の、宜しくお頼み申す。儂はこれから鶴瀬の方に行くので、跡部殿等に相談しながらよしなに。

土屋は言い終わると、脱兎の如く坂を駆け下りて行った。

土屋・鶴瀬の衆、儂は勝頼様が家来、土屋と申し候、勝頼様自じきじきの鶴瀬の衆にお願いせよとお話があつて、ここに

まかり越した者。鶴瀬の衆、聞いて下され。

鶴瀬の衆・一体何事じゃ。土屋様と言つたら勝頼様ご家来衆でも第一の豪の方と聞いているが、その土屋様が、我らに何事かのう。

土屋・おー。このように集まっていただけか。皆の衆も知つての通り、今、勝頼公は、織田信長めの総攻撃に遭い、これから笹子峠を越えて

大月の岩殿城に赴く途中ぞ、駒飼には、駒飼の衆が寄せ手を少しでも防ぐべく陣屋作りをしてくれておる。ここ鶴瀬の方でも追っ手を少しでも押し留まらせる事ができるよう陣屋を所望じゃ。皆の力でできるだけのものを作ってくれはしまいかのう。

鶴瀬の衆・良く判った。お作り申しませう、たいした物はできぬ共、今こそ勝頼公、いや武田家恩顧の者として我らできるだけの事をしてもらおう。

土屋・いやいや、鶴瀬の衆のその一言、これほど有り難い言葉は有り申さぬ。勝頼公にすぐさま知らせるで、よろしくお頼み申しますぞ。

この時、天正10年3月7日頃の出来事であろう。

土屋・お館様、お指図通り、駒飼、鶴瀬に陣屋を作るように里人に頼んで参りました。

勝頼・うむ、ご苦勞であった。時に、土屋、秋山、跡部よ、信茂からの使いは遅いのう。

一同・はは、お館様ご心配の通り。もはや、裏切ったのでは。

土屋・信茂殿は、義の方そのような事はありません。

跡部・いやいや、譜代衆の穴山様、木曾様しかりじゃ。信茂殿も、岩殿において、家臣共の反対にあえば、心が動こうぞ。

☆勝頼は、信茂には儂が命令したことじゃ。お前達が心配せんでも良い。儂とて既にここ笹子峠を越えることは、もとより考えておらぬ。儂の思いはただただ、諏訪と古府中と新府にあるのじゃ。それを判っておるのは、信茂だけじゃ。それにしても、織田めらの追っ手が遅いのう。

3月9日月明かりが差す頃、小声で

小宮山・土屋殿、土屋殿。

土屋・誰じゃ、お、お。お主、小宮山内膳繁友殿ではないか、こんな夜更けに如何した。今まで何処に居ったのじゃ。

小宮山・話よりも、お館様にとり繋いで下され。お館様の存亡の危機に、じっとしておられぬのじゃ、恩顧の者の務めと思ってお叱りを顧みず、このようにまかり越した次第、お館様に取り繋いで下さらぬか。

土屋・おー、おー。それこそ真の武田武士じゃ。今すぐお館様にお取り次ぎいたそうぞ。

篝火のたかれた薄暗い今日建てられたばかりの陣屋の一角で、勝頼と内膳は向き合った。

勝頼・土屋から聞いた。駆け付けてくれたと、よう駆けつけてくれた。苦しゅうない、面を上げませい。内膳、よくぞ駆け

つけてくれた。礼を言うぞ。

小宮山・お館様、お許しただけなのでござりまするか。

勝頼・内膳、許すも何もあつたものではない、其方の儂に対しても義の心に気がつかず、蟄居などとして遠ざけておつた儂の人を見る眼の無さに主にとっては、申しわけなかった。よくぞ駆けつけてくれた。

小宮名・お館様。声にならぬ声が漏れ、右手で両の頬を拭った。

勝頼・時に内膳、主に蟄居を命じておつたが一体、何処におつたのじゃ。

小宮山・はは、それが、小山田殿の計らいで大月の沢井なる山中に居を構えて、世話になっており申した。

勝頼・何と、小山田が元におつたのか。

小宮山・はは、一日中日が当たり、至極住みよい処でござりました。ここにまかり越したは、小山田殿の計らいでござります。

勝頼・何と、信茂が、信茂がどのように申したのじゃ。

小宮山・はは、とにかく儂は、ここを動かしたくとも、動けぬのじゃ。主にも言えぬ。じゃが、直ぐにでも土屋殿の元へ駆けつけて下さらぬか、と申し渡されました。したがうて、土屋様の元に、家族一同でまかり越した次第でござります。

☆信茂め、何という奴じゃ。儂の思いをこのような形で果たしてくれるとは。信茂の事じゃ、儂の言葉にしっかりと応えてくれようぞ。

やはり、父信玄公が、弓矢の御談合七人衆に加えるはずよ、儂が目にも狂いは無かった。これで、心置きなく父上の元に行くことが出来ようぞ。

勝頼・誰か文箱を用意せい。

北条夫人・は、今すぐにお持ち致します。

勝頼・うむ、頼む。

三人が、辞世の句をしたためる。

勝頼・「おぼろなる月もほのかに雲かすみ　はれてゆくえの　西の山の端」

北条夫人・「黒髪のみだれたる世ぞ　はてしなき　思ひに消ゆる　露の玉の緒」

信勝・「あだに見よ　誰も嵐の桜花　咲き散るほどの　春の夜の夢」

この時世の句が、何処で詠まれたのか、大善寺でなのか、駒飼、鶴瀬の陣屋でのものなのか、定かではないが、三者三様の思いが込められており、戦国の世の悲しさを伝えていると思われる。

さて、現実に戻り

家来・お館様、お館様、織田方の手勢が、既に天目山に見えるところの伝令です。

勝頼・左様か。準備を致そうかのう。触れを出せ。

一同・おー

勝頼・駒飼では戦わぬ。戦う場所は、鶴瀬の一力所のみ。者共移動する支度して出来た者から鶴瀬に動きませい。

## 六、武田家最後の合戦

駒飼陣屋から鶴瀬陣屋まで大凡二里、陣屋に駆けつけた勝頼は追い詰められた際、跡継ぎの武田信勝が元服（鎧着の儀式）を済ませていなかったことから、急いで陣中にあつた小桜韋威鎧（読・こざくらかわおどしよろいかぶと）（国宝。武田家代々の家督の証とされ大切に保管されてきた）を着せ、そのあと父子で自刃したという話が残っている。その後、鎧は家臣に託され、向嶽寺の庭に埋められたが、後年、徳川家康が古府中に入国した際に掘り出させ、再び菅田天神社に納められた。

勝頼・皆の者、いよいよ武田の存亡をかけた最後の合戦である。その戦を前に、信勝に元服の儀を行うこととする。

一同・はは、早速準備を致します。

勝頼・信勝、立派ぞ。

信勝・父上、ありがとうございます。

そこにいる、全ての者がその数時間後に武田家の滅亡となることに気がついておりながら誰一人として、そのことを口に出した者はいない。

何時しか追っ手が近づいてきていた。時に三月十日、陽が上がりきるころ、織田勢です、の一報が、届けられた。

土屋・お館様、ここ駒飼・鶴瀬では敵を防ぎきれませぬ。お館様は、勝頼様一行は武田氏ゆかりの地である天目山棲雲寺を目指し退かれたら良いかと思えます。

勝頼・皆の者すまぬのう。我らは土屋の言うとおり天目山棲雲寺を目指そうぞ。さて進発じゃ。

目指した訳は、応永23年（1416年）、上杉禅秀の乱に加担したとして、室町幕府の討伐を受けた、甲斐守護武田信満がこの山中で自害した。信満の遺骸はこの寺に運ばれて葬られたとされ、棲雲寺には信満の宝篋印塔や、ともに自害した家臣達の五輪塔が存在している。武田信玄も軍旗・軍配・陣中鏡を同寺に奉納したと伝えられている。

しかし、既に時遅し、勝頼は進路をふさがれた。後方からは滝川一益の追手に追われ、逃げ場所が無いことを悟った

三月十一日、天目山棲雲寺への途上、田野で滝川一益の追手に捕捉され、巳の刻（午前十一時頃）に勝頼は嫡男の信勝や正室の

北条夫人とともに自害した（天目山の戦い）。享年二十七歳、伝説伝承はいくらでもあるが、勝頼公は戦う気力がなかった、信勝様は華麗に敵と渡り合った、北条夫人は最後まで勝頼公の御側を離れなかった、付き従った女房達は、それぞれが近くの日川に飛び込んだり、自害をしたりと言うことであるが、真実、確かなことは残された文章だけでは判らない、又、伝承にしても定かではない。あるのは解釈の違いだけであるとしかいいえなからう。

何はともあれ、武田家が滅んだのである。

この時に、土屋惣藏の片手千人斬りなる伝説が生まれたのである。

土屋・お館様、いよいよ別れの時が来たようござります。拙者、これより敵方滝川一益隊に切り込みます。お館様、お先に参ります。

土屋は、矢束を解き、細い橋を頼りに、日川を越え攻め寄せてくる敵を、次々に射落とした。矢が尽きると、土屋は太刀を振りかぶって、敵二、三百人が控えている真ん中に切り込んだ。土屋の後に安西伊賀守・小山田式部丞・秋山源三・小宮山内膳らが続き、小勢ながら死に物狂いで戦ったので、織田方は切り立てられ、甚大な被害を受けたと伝えられている。

だが、敵は多勢、次第に追い詰められ、勝頼の近くにまで敵兵が現れ始めた。嫡男信勝は、敵を切って飛び廻り、その姿は勇猛さと華麗さがあり周囲の目をひくほどであったと伝わっている。信勝は享年十六歳であったと言う。

勝頼は、敵との死闘が始まると、安西伊賀守・秋山紀伊守をして、北条夫人に小田原へ帰り、自分の菩提を弔ってくれるよう伝えた。だが北条夫人は頑として聴かず、小田原から付いてきた侍臣早野内匠助・劔持但馬守・清六左衛門・同又七郎（六左衛門の弟）を召し寄せ、ここから脱出して小田原の実家に文と遺髪を届けるよう命じた。夫人は静かに黒髪を束ね丁寧に手に巻き自らの手でそっと切り落とし、懐紙に丁寧に巻き強い口調で、命令した。

北条夫人・わらわのたつての頼みである。勝頼様、信勝殿、わらわのこの時世の句と共に、束ねた髪を手渡し、よろしく頼みます。

勝頼・そこ元も共に小田原に行きなされ。

北条夫人・私は、勝頼様の妻でございます。それが殿の御身が危ない時にどうして、我が身だけで御側を離れられましょつか。最後まで

殿の御側を離れませぬ。

はつきりと凜とした口調であり、勝頼も侍従の者達も口を開けずに一瞬思い空気が流れた。

家来・御側におりたいのですが、ご命令とあれば仕方がなきこと。確かに小田原にお届け致します。

直ぐに鶴瀬を離れ、小田原に向けて出立した。武田を裏切ったと言われている小山田の笹子峠に向けて出発したのであります。もとより、小山田殿は、武田家を裏切っておらず、関と言われている逆茂木も通行自由であった。

まもなく、北条夫人の近くにも、鉄炮の弾、弓矢の矢が届くようになった。北条婦人は静かに目を閉じ、胸の前で両の手を合わせた。

北条夫人・お館様、お願い致します。

そつと目を開け、懐から護身用の短刀を取り出し、自刃して果てた。

勝頼・涙を流しながら、すまぬと一言。

白刃を振り下ろした。

事の成り行きを見守っていた女房、侍女たちもこれに続いた。北条夫人は、時に享年十九歳であったとのこと。

北条夫人の遺命を受けた者達は、数日後に小田原に遺髪と三人の辞世の句を届けたという。

北条夫人、信勝、勝頼が相次いで死んだ。

内膳・お館様は、はや夫婦ともに亡くなられた。誰のために戦っているのかと叫んだ。

土屋・その通りじゃ。残されし我ら敵方の命一人でも共に冥途に連れ参ろうぞ。

お館様にお供出来なかつたは残念である。

もう一度最期のひと戦をして腹を切ろう。意ある者は儂に続け。

と言いつち、大軍の中に切つ先を揃えて突入し、獅子奮迅の働きをしたが多勢に無勢である。彼らはみな討たれてしまったという。正午まで、武田方で生き残っている者は一人もいなかったと伝えられている。殉死した家臣の多くは、勝頼の高遠時代以来の家臣であり、その他に諏方衆とみられる人、武田譜代は土屋・秋山兄弟が目を引きだけである。

跡部・河村・安西と、数人の小山田一族の名前が見られるのであるが、山県・原・内藤・馬場・春日などの上級譜代の縁者は一人もいない

。このことからしても、勝頼はやはり武田勝頼ではなく、諏訪四郎勝頼として死地に赴いたのではあるまいか。

## 七、信茂公死の覚悟で信忠の前へ

岩殿城に詰めていた信茂公の元に、勝頼様討ち死にの報せが届いたのは、その日天正十年三月十一日の夕刻であった。

信茂・お館様。ご立派な最後であった。お館様らしゅうなりましたな。

両の目から涙が溢れて止まらぬほどであったが、それを拭おうともしないで、じっと峠の方に目をやっていた。

家臣・お館様、無念でございます。

信茂・じつと目を瞑り、先々に思いを馳せていた。かつと目を開き、

・ 儂が命と引き換えに、郡内領地には、織田、徳川連合軍は一步も、誰一人とも入れぬ。これこそが、勝頼公との約束事じゃ。皆の者、安心せい。これで郡内には、敵は入ってこぬぞ。

家来一同・お館様

岩殿砦を夕闇が包み始めていた。

信茂・皆の者、儂はここに残り、もう少し戦況を確かめる。それぞれがそれぞれの家に帰りませい。

家来一同・お館様、儂等もここに留まらせて下さりませぬか。

信茂・ならぬ、その方達は、これからの郡内を守るのじゃ。その方達が為に、勝頼様も儂に下命されたのじゃ。峠にて、儂を撃てと。首をとれいと、信忠が処へ首を持ってと。

家来・何ですと、それでははじめから勝頼様は郡内のためにお命を……。

信茂・そうじゃその通りじゃ。これからが郡内は、誰の者でもない。その方達皆が、力を合わせ郡内領地、領民を守るのじゃ。この通りじゃ。

(静かに頭をそっと下げぬ。)

家来・お館様。

岩殿城内に一斉に男達の声が漏れた。

信茂は、岩殿城でその夜を迎え、静かに勝頼達の冥福を祈り、次の朝。十二日を迎えた。

勝頼様、お館様、ご無念でござろう。しかし、松姫様達の一行を、ここで見送りその後のことについては、考える所存でござります。松姫様方が、何事もなく笹子峠を越えて、ここ岩殿下を通過する姿を見送るまでは、儂はここに残りましようぞ。

家来・殿、何じゃ、怪しい者を捕らえました。

信茂・何、誰じゃ。

家来・一言も話しませぬし、名前も言いませぬ。ただ、我らが味方でないことは、これ。(胸から取り出させた書状を信茂に手渡した。)

信茂・何、こやつ、織田の手先ぞ。

家来・何ですと。

信茂・書状の内容を読み、ふん、信長の小せがれ如きが。

家来・いかなる事でござりますか。

信茂・信忠め、生意気にも、この儂に古府中の陣屋に來いと。

家来・何ですと、殿、それは、……。

信茂・判っておる、わかりきっておることじゃて、いよいよここから先が、儂が勝頼公から下知された最期の大戦じゃ。

家来・殿、

信茂・心配するでない。勝頼様、儂の身命を賭しての大戦がこれから始まるのじゃ。信忠め、目に物見せてやるわい。

天正 10 年 3 月 22 日、昼下がり、松姫様の一行が、岩殿下、畑倉井山の威徳寺の前を通過していく姿を、目にして娘香具姫のこれから先を、松姫様に託したのであった。

信茂・松姫様、ようご無事で何よりです。

これはこれは、貞姫様、小督姫様、香具姫のことよろしく頼みますぞ、仲良うして下さい。この通りです。

ここ岩空山威徳寺は、小山田家菩提寺都留下谷にある、曹洞宗大儀山長生寺末寺である。ここで、信茂立ち会いの下、香具姫が一行に加わ

り、供回りの者、仁科盛信公手勢十五名ほど、古府中より勝頼公手勢、信茂公手勢、併せて四五・十名の大所帯となって、金竜庵に向かい出発させたのである。

この時、信茂は遠大な計画を持ち、それを松姫様に伝えていたのである。それは、武田家復活への道のり、この一語を松姫様に託し香具姫様への伝言を頼んでいたのである。

その後の武田家復活の道筋を見てみると、全てが信茂公、勝頼公の思惑通りに事が運んだことと理解して良いのである。香具姫様のお子が、武田家のご当主、武田信興公、寛文12年（1672年）生誕、武田信正の子で、武田信玄の玄孫にあたる子を、香具姫の娘、信茂公孫が、この世に送りだしたのである。

これこそが、信茂公最大の武田家への貢献であると理解し、武田家再興の第一人者が、信茂公であると誰もが認めざるを得ない結果である、と信茂公の深謀遠慮には只々、頭が下がると共に驚かされる。

ここまで考えての勝頼公とはかりごとであったかと推測したい。

信茂・やれやれ、これで一安心じゃわい。北条殿御家中、松田殿に依頼しておいたことがきつと功を奏し一行は、金竜庵に

無事到着したのであろう。岩殿山砦の入り口、畑倉の春日神社前で残った郎党に、これから先のことを伝えた。

信茂・小幡よ、そちは大砦に残っておる、千鳥姫・万生丸を連れて西奥山へ逃れい。そこから浅利にぬけて、富士講の通る富士道を利用して谷村館まで行くが良い。

小幡・はは、確かに承りました。

信茂・頼むぞ。今日は3月22日午後、小幡よ、其方は砦に向かえ。儂は、一足先に谷村に戻り、明朝23日に古府中へ向けて出立しようぞ。

小幡・はは、確かににお守り致しまする。

信茂・うむ、頼むぞ

その夜、夜更けて北条の軍勢が岩殿砦内に入ったかと思わせるような情報が大砦に伝わった。小幡は、すわ北条の夜襲かと思ひ慌てて千鳥姫・万生丸を連れ出し、大岸壁の横をぬけて東奥山に逃れようとした。途中、万生丸が大声で泣き出し、とつさに崖の上から投げ落とした。今の稚児落としての伝承である。

その後、小幡は、小和田の東光寺に入り側室千鳥姫、次男賢一郎を案内して時を待った（本堂下に穴を掘り、隠れていたとの伝書有り、数年生存後述）。

さて、谷村館に帰り着いた信茂は、

信茂・母上、私は、信忠が寄せた書状の通りに致す所存。お覚悟を持って、古府中に共に行って頂きます。他の者達も良いな。儂が、帰らぬ時はその方達で郡内を守るのじゃぞ。信忠とて、男・男の言葉に一言はあるまいて。

家来・殿。

信茂、何、儂達が命、郡内にとどめ置く。良いな、夜も更けた。さ、皆の者、今宵はもう床につくこととしようぞ。

家来・はは。

明くる3月23日、日が高く上がった頃、

松姫一行に従った一人が、信茂の前に進み出た。

家来・殿、松姫様達御一行、昨日、佐野川を抜け、陣馬山頂を過ぎました。二十四日には、金竜庵にご到着することであるとのこととで伝令に参りました。北条勢は、全て道を空けてくれました。これもひとえに殿がお陰と、松姫様方が申しておられました。

信茂・おー、左様か、左様か。うんうん。これで心置きなく、古府中へと出立できようぞ。

信忠め、待っておれい。郡内領主、小山田信茂が意地、目に物見せてくれようぞ。

信茂は、伝令の声を聞き、そんなに急いでいかなくとも、古府中には参ると、伝えてあるのじゃ。松姫様方が、確かに八王子の金竜庵に到着したことを聞いたのでそれ程急ぐこともあるまいて。良からう、確か信忠めには24日迄には出向くと伝えて置いたでう。わざわざ、死に急ぐこともなからう。

信茂、香具姫一行の様子を耳にして、安堵して供回りの者と古府中の躰躰が崎館近くの陣屋に出向いた。

信忠より呼出状が届けられたのが22日、24日には、甲斐善光寺近くの信忠が陣屋に出向けとのこと。

信茂・相判った。24日正午には、信忠殿の御前に参ろうぞ。

使者・わかり申した。御大将にそのように申し上げます。

信忠・信茂殿、よう参られた。織田の家臣に名を連ねる気はござらぬか。

信茂・笑止、何を今更申されるか。我は郡内領主、小山田出羽守信茂、一君に仕える気は毛頭ござらぬ、笑止。儂が主君とするは、信玄公、勝頼公のみである。

信忠・相わかった。首をもらい受けるが。

信茂・悔いはござらぬ。今一度、約束を思い出して下されい。郡内領地、領民には、一切手出しをせぬとな。

信忠・お約束申し上げます。

信茂・儂が人生、命、郡内領民、領地の為に使わせてもらい、この上ない心持ちじゃ。

このあと、首をはねられたとか、自ら切腹したとか、いろいろ言い伝えられているが、何と信茂公に関わりのある墓地等が、四力所もある。

1、甲府市善光寺裏の民地に「旗持ち地蔵」として胴塚が建てられており、更には、毎年三月二十四日を中心にそれ以前の日に、地域の方々に親しまれ、旗持ち地蔵尊として祭が、現在まで営まれているとのことである。



2、大月市初狩にあった瑞龍庵跡地に、大月市で建立した立派な石碑がたつて、首塚として祀られている。

小山田左兵衛門尉信茂公顯彰碑



小山田信茂公の首塚（湘南塔）



此處中初狩藤嶋の地は詳雲山瑞龍庵並びに地蔵堂跡で瑞龍庵は側子無量山福聚院の子院である。福聚の本寺は都留市金井の富春山桂林寺で元禄初年その中興四世湘外祖景が瑞龍庵開山となったものと思われる。瑞龍庵は桁間五間半梁間三間半の本堂兼庫裡を有したが、明治40年の水害により流失した。甲斐国誌古蹟部に「小山田古墳」として（中初狩上の原より西南の山足藤嶋と云ふ地にあり、随龍庵の側なり古き石塔あり。土人相伝へて小山田氏の墳墓なりと云ふ）とあり、今僅かに湘南塔の一古塔礎を残すのみであるが、小山田氏、

桂林寺、福聚院、瑞龍庵の脈絡の中で当庵に小山田氏墓所あるも不自然ではない。信茂公法名は、羽根子長生寺過去帳に依れば、青雲院殿武山長文大居士天正10年3月24日 小山田出羽守 43才

惟心に戦国以来時移り江戸に入つて朱陽の儒家、忠孝順逆の説を普遍して徳川治世の礎となす。即ち順逆は後世の所説で独り信茂公戦国に生きて後世の規範に律せらる慨嘆之に過ぐるものなし。此度有志相集つて公を顕彰するの建碑に際し聊か公の為その長怨を雪かんとする。（石碑記載文章より）

3、大月市小和田の東光寺様境内に信茂公お位牌、過去帳に氏名が残されている。（墓石様の大石も現存している。）

東光院殿前羽州大守契山存公居士 天正10年壬午年11月18日寂 小山田 信茂

虎溪良閑大師 天正15丁亥年2月18日病没 信茂室 千鳥姫

一雲齋鶴翁居士 天正14年丙戌年3月12日没 信茂二男 中沢賢一郎

英林良雄大子 天正20年12月12日寂 小山田ノ士 中沢良平

寂とは・仏語。仏道修行により有無執着の迷いの境地を脱却して、悟りの境界(きょうがい)にはいること

没とは・「歿」と通用)死ぬ。「没後・没年/死没

4、 東京都あきる野市五日市高校の敷地の中に胴塚(鎧塚)が、残されている。

徳川家康の考え方(江戸城の鬼門の方角⇨日光東照宮に祀られている⇨江戸を守る⇨江戸城、江戸市中を守る)から考えたときに、この1の場所は、甲府城下町、甲府善光寺の鬼門に当たる方角である。440年もの間、裏切り者と言われていた信茂公の胴塚をそんな場所に作るであろうか。又は、当時の人は、信茂公を裏切り者にとらえていなかったのではないか、このように考えないと1の意味が理解出来ない。首は、荒川の

土手辺りにさらし首とされていたものを、ご家来衆の小幡太郎が、奥山の東光寺まで運んだ、と考えることは出来ないだろうか。

1と2と3の関わりについては今後、研究する余地がある様に思う。さらに、あきる野市にまで話が及ぶとなれば、さらに考えなくてはならない。あきる野市の場合には、首塚、胴塚と言うよりも「鎧塚」と呼んだ方が、より適切ではないかとも、誰ともなく耳にしたことがある。

このように四つの地域に伝説が語り継がれていることを考えると、信茂公謀反説が、本当かどうかまったく理解出来なくなるのであるが、疑わしく思われる方は、単に私一人だけには、とどまらないのではないか。

信茂公は、最期まで郡内領民、領地の御領主様として国衆・小山田氏の名前を後世に伝えているが、伝聞情報を主にまとめられた諸々の古典で、武田家を裏切ったとされてきたが、最近の研究では、裏切りどころか、大忠臣であったとする説が、少しずつではあるが世に認められてきている。

その良い例の一つとして(信道系武田家)晴信(信玄)・信親(竜芳)・信道「大久保長安事件⇨信道、信正が伊豆大島に配流、信道逝去、信正武田 信正(たけだ のぶまさ)は、江戸時代前期の人物。武田信道の子。武田信玄の曾孫にあたる。子に武田信興。妻は内藤忠興の娘(忠興と香具姫の娘⇨信茂の孫⇨武田家再興)。これこそ、信茂公・勝頼公の思いであったと考える。(後述)

残念な事で慶長18年(1613年)、大久保長安の死後に起こった大久保長安事件に連座して、父信道とともに松平康長に預けられた。のち、元和元年(1615年)に伊豆大島に配流され、同島の野増に居を構える。父が没したのちも赦されず在島したが、上野寛永寺の公海のとりなしなどがあり、寛文3年(1663年)3月、徳川家光の13回忌に赦免され江戸に戻った。そして磐城7万石大名、平藩主内藤忠興に迎えられ、忠興の娘(母は小山田信茂の娘香具姫)の婿となった。二人の子信興は高家に列せられている。・信興・信安・信明・護信・信典・信

之・崇信・信任・要子・信安・昌信・邦信・英信と続いている。(この時に、武田信正が小山田信茂が孫と結婚して信興を誕生させて現在の武田家の再興が完成したのである。これこそが信茂公、勝頼公の英断中の英断であったこととらえている。)

以来、郡内の英雄、小山田信茂公、世間には裏切り者とそしられ約300年後、明治12年(1879年)時の陸軍大将、乃木希典が、岩殿山上の頂きに立ち、詠んだ漢詩

「英雄前後幾興亡 剣によつて帳然夕陽を見る」と詠まれ、岩殿大砦に立った、乃木大将はおそらく信茂公裏切り説に対しては、不可思議としか言いようのない感覚を持たれたに違いない。漢詩冒頭の「英雄」は、間違いなく信茂公に思いを馳せて詠まれた一語であると理解したい。

先述の繰り返しとなるが、松姫様と信茂公と勝頼公の深い想いが、凡そ450年を経た令和4年3月、威徳寺本堂にて、お二人再開の法要「信茂公・松姫様ご供養祭」が執り行われた。

祭壇の真ん中に松姫様、その右横に信茂公と二人の位牌が、信松院ご住職様のお手で飾られた。

そして鐘の音と共に、法要の読経が厳かに開始された。その<sup>2~3</sup>分後に、二陣の突風が本堂を抜けて行った。本堂入り口に垂らされていた供養祭の幕が静かに動き停めていた画鋏が落ちた。役員が、再度それを垂らしたが、その後は厳粛な内に法要が終了した。参加されてお香を焚かれた誰彼ともなく、あれは間違いなく松姫様信茂公である、との声が上がった。そこに参加されていた、誰もがどのように受け取られたと思われた一場面であった。

このように私達、小山田信茂公顕彰会の会員は、文字通り信茂公の活躍を掘り起こし、汚名返上に努力し、地域活性化に努めているところである。今回、県で作成した、DVD信茂と勝頼(物語と略付きではあるが)の映像が、県民はもとより全国民の考えに影響を与える媒体となつて欲しいと心から願っている。(完)

# 現代までの小山田信茂公への一般的なご意見として引用させていただきます。

## 大阪府在住の団塊世代の？様引用

### 小山田信茂は武田勝頼を裏切り織田方に寝返ったがその末路は？

2021/1/27 2021/3/22 [歴史・郷土](#)

戦国時代のメインの物語ではありませんが、武田信玄亡き後、織田信長・徳川家康連合軍や後北条氏との戦いを重ねた武田勝頼の重臣で、土壇場で勝頼を裏切って織田方に寝返り、武田氏滅亡を決定づけた小山田信茂の末路は興味深いものがあります。

今回はこの裏切り者・小山田信茂についてわかりやすくご紹介したいと思います。

1. 小山田信茂（おやまだのぶしげ）とは

小山田信茂（1539年か1540年？～1582年）は、戦国時代の甲斐武田氏の家臣の武将で、「武田二十四将」の一人に数えられています。

彼は戦国最強とも評される武田氏の譜代家老衆で、文武に優れた人物であったとされています。しかし彼を最も有名にしたのは、そのような美点ではなく、「最大の汚点」とも言うべき「裏切りによって武田氏を滅亡に追いやった」という事実です。

なお、小山田氏は代々、甲斐東郡内領の「国衆（くにしゅう）」でもありました。

「国衆」とは、南北朝から室町時代にかけての「在地領主」およびその連合組織のことです。「国人（こくじん）」（国人領主）とも言います。室町幕府の支配に抗して地方で小規模な領主制を形成した地頭・荘官・有力名主などの総称です。郡ないし一国規模で行動し、状況に応じて守護の被官になったり、守護排斥運動の中心にもなりました。

武田氏のような「戦国大名」と小山田氏のような「国衆」との関係は、「主君と家来」という単純な主従関係ではなく、「一種の契約関係」でした。大名が攻撃を受ければ国衆が軍を出す代わりに、大名からある程度の庇護を受けるという関係です。

従って、大名が自分たちを庇護する能力がないと判断すれば、「契約解消」（契約破棄）となり、大名を裏切ることも珍しくなかつたようです。これを「返り忠（かえりちゆう）」と言いますが、要するに「寝返り」です。

(1) 生い立ちから家督相続まで

彼は郡内地方の国衆・小山田氏当主の小山田出羽守信有（1519年～1552年）の次男として生まれました。祖母は武田信虎（1494年～1574年）の妹です。ちなみに信虎は武田信玄の父です。

1552年に父が病死すると、兄の弥三郎信有（？～1565年）が家督を継ぎました。そして1565年に兄が病死したため、彼が家督を相続しました。彼は譜代家老衆に属する「御小姓衆」として、騎馬<sup>250</sup>騎を率いたとされています。この時期にすでに譜代家老衆に数えられていたことから、武田信玄の信任を得ていたものと考えられます。

(2) 武田信玄（1521年～1573年）の家臣としての活動

彼は信玄の治世下で、文武にわたって活躍し、教養人としても知られていました。

1569年の北条氏との戦いである小田原城包囲の前哨戦では、彼は別働隊として御獄城や鉢形城などを攻撃しています。

1570年には伊豆・韮山城を攻撃し、1572年には信玄に同行して「西上作戦」に従軍し、1573年の徳川家康・織田信長連合軍との「三方ヶ原の戦い」では先陣を務め、勝利に貢献しています。

一方、臨在寺の僧侶・鉄山宗純とは優れた漢詩による詩の交換をしていたという記録が、「仏眼禅師語録」にあります。また1570年には焼失した上吉田西念寺の再興に乗り出したりするなど教養人として文化面でも貢献しています。

(3) 武田勝頼（1546年～1585年）の重臣としての活動

信玄存命中は順調な人生でしたが、信玄が急逝して以降は武田氏と運命を共にするように彼の人生には暗い影が差してきます。

1575年の織田信長・徳川家康連合軍との「長篠の戦い」では、敗北後に勝頼の護衛として退却に貢献しました。

その後は、かつて後北条氏の「取次」（交渉役）を務めていたことから、房総里見氏や上杉氏の「取次」として和睦の道を探りました。その一環として上杉家の家督争いである「御館の乱」（1578年）では上杉景勝を支持し、勝頼の妹である菊姫の輿入れにも関与したとされています。

しかしこのことで北条氏政との関係が悪化し、「甲相同盟」の決裂を招く結果となり、彼の領内には後北条氏が頻繁に侵攻を試みるようになりました。



(4) 武田勝頼に対して土壇場で裏切る

1581年になると後北条氏の侵攻を防ぎ切れなくなった彼は、勝頼に支援を要請しました。しかし1582年には織田信長軍の侵攻が開始されたため、武田氏はいよいよ存亡の危機を迎えます。

彼は勝頼に従って着陣しましたが、同じ「取次」という立場の人物が上杉景勝側へ離反したことを知るとこれを嘆いたと言われています。また同じ「取次」であった彼も非難されたようで、被害者意識を強く持っていたようです。

しかし結局防戦すままにならなくなった武田軍は、新府城で軍議を行った結果、彼の領内に退避した後に、彼の城である「岩殿城」で籠城戦を行うことになりました。

このような事態に、彼は武田氏と自分たちが共倒れになることを確信し、自身の「国衆」としての立場を優先し、岩殿城へ向かう途中で勝頼を裏切ることを決断しました。

その際、人質として囚われていた老母を力づくで奪い去ったことで謀反の意思を明確に表明したとされています。

彼は途中で勝頼から離れて先に岩殿城に入り、城門を閉ざして勝頼一行を城内に入れませんでした。そして「天目山の戦い」で敗れた勝頼は「もはやこれまで」と観念して天目山で自害し、武田氏は滅亡しました。

(5) 末路

その後、敵将・織田信忠（1557年～1582年）を訪ねた彼は、織田方から内応を持ちかけたわけではなく自分勝手に離反した「不忠者」として諍（そし）りを受けた後処刑されるという憂き目に遭いました。その際同時に、老母・妻・子供と血縁者もろとも処刑されました。

彼は「国衆」としての小山田氏の生き残りをかけて、勝頼を見限り、織田方に寝返ろうとしたのですが、織田信忠は主君を裏切った不忠者の彼を配下に置いたとしても、今度は自分を裏切る恐れがあると考えたのかもしれない。

武田氏一族および重臣の殲滅を考えていた織田軍にしてみれば、彼ら一族を処刑したのは当然の対応だったのでしょうが、彼にとつては不名誉な「裏切り者」としての汚名だけが残る結果となり、彼の「返り忠」は徒勞に終わりました。

2・小山田信茂が裏切った背景



(1) 武田氏とは「一種の契約関係」なので「返り忠」もあり得たこと

上に詳しく述べたように、小山田信茂は「国衆」でしたので、「織田信長と明智光秀・豊臣秀吉との関係」や、「徳川家康と三河以来の譜代の家臣との関係」とは異なります。

明智光秀や豊臣秀吉は「中途採用社員」でしたが、織田家の「生え抜きの社員」を差し置いて、実力で「成績」(武功)を上げて出世頭となりました。

三河以来の譜代の家臣は、徳川家の「生え抜きの社員」であり、強固な主従関係がありました。

それに比べて「国衆」の小山田信茂は、「国衆」としての自らの立場を守るために、弱い(弱くなった)大名から離れて、現在勢力の強い大名に味方しよう(寝返ろう)という打算が働くのは当然と言えば当然です。

余談ですがNHK大河ドラマ「真田丸」でも、真田昌幸(1547年〜1611年)が「真田家」が生き残るために、どの大名と同盟関係を結ぶべきか苦悩していました。

真田昌幸は真田信之・信繁(幸村)兄弟の父ですが、武田信玄の家臣となり「信濃先方衆」(国衆)となった地方領主で、信玄・勝頼2代に仕え、武田氏滅亡後に自立後織田信長の軍門に降り、滝川一益の与力となりました。

本能寺の変後に再び自立し、近隣の北条氏や徳川氏、上杉氏との折衝を経て、豊臣政権下で所領安堵されました。上田合戦で二度にわたって徳川軍を撃退して徳川家康を大いに恐れさせましたが「関ヶ原の戦い」で西軍についたため改易されました。

しかし徳川家康の重臣・本田忠勝の娘(徳川家康の養女)を娶っていた嫡男・信之は徳川方の東軍につき、後に上田藩初代藩主となりました。これは徳川家に楔(くさび)を打ち込まれつつも、真田家存続を図った真田昌幸の深謀遠慮の結果です。

(2) 「国衆」としての小山田氏は武田氏と過去に敵対した経緯があること

室町時代には、国衆の小山田氏と武田氏とは敵対関係にあったこともあります。彼の祖先にあたる小山田弥太郎は、武田信虎(信玄の父)との戦いで討ち死にしています。その後も信虎との間で小競り合いがありました。やがて小山田氏の領国の都留郡を信虎が庇護する形で小山田氏も勢力を伸ばし、信茂が家督を継ぐころには武田氏の家臣と見なされるようになっていました。

二〇一九年二月六日（水）

▲武田氏に仕え裏切り滅亡す戦国の歴史岩殿山にあり、この短歌が読売新聞（山梨版）に掲載された。

左の短歌は、二月五日掲載投稿への返歌です。

○戦国の城主の汚名はらさんと郷土愛篤き平成の勇士（作・大月市短歌連盟所属某女性）  
以下、

- 通説を鵜呑みにするか疑うか歴史研究つとに進歩し
- 古の価値観のみを信じ込み歴史の流れ理解せぬ君
- いつまでも古説を信じ新説に耳傾けぬ哀れなる主
- 真実は岩殿の木が知っている通説だけが一人歩きし
- 戦国の乱世に生きし武士が名声捨てて領民守る
- 戦国の乱世に生きし武士の生き様重く領民承けて
- 滅したる小山田武田双方の和解なされる新元号の年（令和元年・小山田隆信氏、武田家旧温会入会）
- 小山田が歴史に名をば残すのは領民守る大義第一
- 信茂公歴史に名前残せしは領民の加護大義知られず
- 裏切りと言われ続けて四百年今こそ晴らす領主の無念
- 戦国に裏切り忠義何ぞやと後の価値観通用せず

- 創られし忠義の価値に縛られてじっと我慢の郷土の偉人  
○ 岩殿に乃木大将の思いあり英雄帳然夕陽を見る

作 小俣公司

## 岩殿城歌

作詩 澤登初義 作曲 古谷 宏  
編曲 松本 浩 唄 平川幸夫 詩吟 鈴木鶯風  
唄 三浦光一 詩吟 笹川鎮江 編曲 佐野雅美  
唄 大月市民合唱団

1 武田のまもり 岩殿は

2 城下のおみな おさな児を

3 夏草香る 大手門

関八州の 大砦

要害古城に 向わせし

岩肌堅く 茂る松

譜代の城主 小山田は

武将の意中 知るや君

矢立の杉も 色増しぬ

ああ甲軍の 旗頭

ああ混乱の 世ぞ悲し

ああ岩殿の 月新た

ああ甲軍の 旗頭

ああ混乱の 世ぞ悲し

ああ岩殿の 月新た

詩吟 英雄前後幾興亡 剣によって

帳然夕陽を見る (乃木希典)

## 岩殿山上の碑

乃木希典 陸軍大将

明治十二年（一八七九年）岩殿山上の頂きに立ち詠んだ漢詩

「英雄前後幾興亡剣によって帳然夕陽を見る」



(前頁、参照)

『信長公記』『甲乱記』『甲陽軍鑑』によれば、小山田信茂は織田家に投降を試みたが信忠から「武田勝頼を裏切るとは、小山田こそは古今未曾有の不忠者」と言われ、3月24日に母と妻子、武田信堯、小山田八左衛門、小菅五郎兵衛らとともに甲斐善光寺(甲府市善光寺)で処刑され、郡内領は無主となった。天正申午の乱後、甲斐武田遺領は徳川氏の支配領地となった。

次頁、甲陽軍鑑品57 原文(新人物往来社版、読み下し文現代語訳)

ハ勝頼公新府ニテ御謀略アリテ面々ノ小屋々々ニ引キ入り在ベントノ義ナリ。各々其意ヲ守リシカトモ其謀略モ相違セリ。夫レ故ヘ武川衆勝頼公御供中シタル人ナシ。」

〔小山田兵衛尉逆心勝頼公討死の事付信長公勝頼父子の頭実檢の事〕

一、小山田兵衛郡内岩殿へ入奉らんと申に付、<sup>①</sup>鶴瀬まで御座なされ、鶴瀬に七日御逗留<sup>とらりゆう</sup>なり。  
(其内) 柏尾のぢんくわをきりておとせとある子細は、柏尾<sup>②</sup>(は)源氏調伏<sup>ちようぶく</sup>の寺也とあれ共、山伏共  
さま仕まじきと申す。此躰に御足本より敵対の様に御座候。小山田兵衛鶴瀬より郡内の方に城戸<sup>きど</sup>  
を際限なく仕る。是は如何と人々尋候へば小山、田被官共申は、(勝頼公)岩殿へ御うつり候(はど)  
即時<sup>④</sup>に小口<sup>こぐち</sup>を持べく候(為)と申す。又小山田八左衛門と申其比<sup>ころ</sup>中老の誉ある武士(也。此者)参候  
へば、「此侍は」勝頼公(日来)御秘蔵の武士なる故悦<sup>よろこび</sup>給ひ、<sup>⑤</sup>すはだにて参候に付、勝頼公めし  
がへの御具足を下され、御次にて八左衛門其御具足を著<sup>き</sup>申候。初鹿<sup>はじか</sup>伝右衛門は参らず候やと御尋  
あれば、伝右衛門<sup>⑥</sup>かはうらと申恵林寺の奥山へ入候に、鶴瀬へ参るべきと申候へば、郷人<sup>ごうだん</sup>共伝右  
衛門<sup>⑧</sup>内方を是非其人質に取候て越申まじく候(と申)。若<sup>もし</sup>無理に御越候はゞ二度「と」此方へよせ  
申まじく候と<sup>ことわり</sup>理<sup>ことわり</sup>て、それにてもゆかば殺すべき摸様なる故、伝右衛門鶴瀬へまいらず候。いづ  
れの山小屋にても皆如<sup>レ</sup>件(と申上)。<sup>(此)</sup>

(注) ①東山梨郡大和村鶴瀬。近世は甲州街道の一宿駅 ②未詳。一説神願かとする ③柏尾は大善寺の

こと。大善寺を源氏調伏の寺とするのは、『甲斐国志』のいう通り誤説であろう ④城郭・陣營の要所である出入口。小口・虎口どちらも書く ⑤甲冑をつけないこと。素肌 ⑥東山梨郡三富村川浦 ⑦塩山市小屋敷にある ⑧他人の妻の敬称。内儀

去ほどに三月九日の夜、右の小山田八左衛門と勝頼公御從弟武田左衛門ノ佐殿とくみて小山田兵衛人質をうばひ取、早々郡内へのくとして拵たる小口より鉄砲を打出す。左衛門ノ佐殿は小山田兵衛妹婿なり。小山田八左衛門は兵衛丞從弟なり。是を見て尽ちり御供(の)衆四十三人ならでなし。鶴瀬の向田野と云在家七ツ八ッある処へ勝頼公十日の朝御つぼみ有に、御馬の鞍置人なくて侍大将の土屋惣藏と秋山紀伊守をきて引出す。龜の甲の御持鎧など阿部加賀守と「勝頼公御守」温井常陸守としてかづく(也)。もとより十一日巳の刻に田野のおく天目山の郷人共六千人余別心して(出る)、其中に侍は辻弥兵衛大将になり、勝頼公へ矢・鉄砲を打懸奉る。信長よりの討手は川尻与兵衛・滝川伊豫都合五千にて攻かゝる。郷人案内を仕り裏へまはす(を)三度つきちらし給へ共叶はずして遂に亡うせ給ふ。

(注) ①信虎が駿河で生んだという上野介(信友・信政)の子という。童名勝千代、名は信光・信雅等に作る。小山田信茂らと共に甲府善光寺で殺さる(品第五十八) ②東山梨郡大和村田野 ③永禄五年勝頼を信州高遠城代としたとき勝頼につけられた八人の士大将の一人(品第三十二)。勝頼に従い田野で殉死 ④はじめ使番十二人衆の一人、のち信勝の傳となる(品第十七・廿九)。田野で殉死 ⑤東山梨



小山田信茂公顕彰会

